

桜の落葉

清岡卓行



桜の落葉

清岡卓行

毎日新聞社

桜さくらの落葉おちば

定価 二二〇〇円

昭和五十五年十二月十五日 印刷
昭和五十五年十二月三十日 発行

著者

清岡卓行きよおか たかゆき

編集人

川合多喜夫

発行人

牧内節男

発行所

毎日新聞社

●一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
●五三〇 大阪市北区堂島
●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
●四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷

製本 大口製本

桜の落葉
目次

I 忘れられない音

ティボーの例 13

死との切線 15

敗戦直後の自衛 16

胎内音 18

象のおなら 20

夜明けの電話 21

遼と金 23

ビー玉あそび 24

金子光晴の下駄 26

授業のチャイム 27

郷愁と汽笛 29

期待のひびき 31

秋霖のなげき 33

冬薔薇の剪定

34

唸るジューサー

36

Ⅱ 人

喪章の付いた絵

——哀悼岡鹿之助先生

41

中年の心を支えた青年の一文

——宇佐美斉の詩人論

47

詩と碁の交錯

——那珂太郎の一面

51

歩道橋の思い出

——波沢孝輔の立姿

56

飄飄とした風格

——渡辺勝夫の誘い

60

批評の前衛

——宮川淳への感謝 64

詩誌「ユリイカ」のパトロンヌ

——米川丹佳子と伊達得夫 68

作家と詩

——高見順の場合 74

故人の書簡 83

金子光晴への弔辞 88

Ⅲ 浄瑠璃寺初訪 97

Ⅳ 野球をめぐって

ホームラン 二つの〈詩〉

——王貞治の世界新記録突入に

さらば比類なきホームランの夢

122

ある野球人の劇的な生涯

—— スタルヒンの栄光と苦難

128

初夏のちいさな喜び

136

名人を知るものは名人

—— 広岡達朗と吉田義男

140

猛打賞と木挽町

145

V 音楽・ドラマ・詩の演出

優美断腸の小曲『二泉映月』

151

ストコフスキーの思い出

156

ヴィラ・ロボス記念音楽会

161

爽やかな『四季・ユートピアノ』

165

地下鉄の壁の詩

168

VI 現代詩と俳句に触れて

詩における十二音 ほか 175

詩人の俳句 186

俳句への羨望 197

VII 詩にかかわる読書ノート

『萩原朔太郎全集』第十二卷 211

渋谷孝輔『越冬賦』 214

北川透『遙かなる雨季』 218

『平出隆詩集』 224

浜川博『素顔の文人たち』 229

吉原幸子『夜間飛行』 233

清水哲男『冷たい夢』 237

宇佐美齊「ランボー私註」
241

吉本隆明『戦後詩史論』
244

岸田衿子『あかるい日の歌』
253

河盛好蔵『パリの憂愁』
256

VIII 生活の夢 ほか

いそいそと「無職」に戻って
261

無人の白い蛇の島
266

コンクリート船
271

いちばん好きな花
276

桜の落葉までの半年
280

あとがき

装帧
丹阿彌丹波子

桜の落葉

I

忘れられない音

ティボーの例

生活の現実のなんらかの音が自分のそのときの主観と強烈に結びつき、ある象徴になつてしまふ偶然。その偶然についての随想的な記述は、多くの場合他人には退屈なものだらう。読み手が書き手そのひとに関心を抱くかどうか、抱くとするならそれはどんな種類のものか、ふつうはそうした事柄にも狭くかわつてくるからだ。しかし、退屈でない場合には、この音と主観の結合は人生の真実をことさら味わい深く伝えるかもしれない。

たとえばフランスのヴァイオリニスト、ジャック・ティボーの回想記『ヴァイオリンは語る』（粟津則雄訳）にこんな個所がある。——彼はヴァイオリニストの父親が男手一つで子供たちを育

てる家庭で成長するが、七歳のとき兄の一人が死に、知人の家に託けられる。半月後、父親が彼を連れにきて自分の家に戻る。そのとき、悲しみで口もきけない二人を乗せた辻馬車の馬が、かつかつと蹄鉄を敷石の道にひびかせて長いあいだ走る。彼は後年、だれかの死を聞くと、ボルドーの町にひびいたその蹄鉄の音が耳に生生しくよみがえったという。

人の死と蹄鉄の音の結合はむしろ平凡だろう。しかし、私はその回想の個所で、冴えわたる死の音を聞いた。それは、私があらゆるヴァイオリンの中でティボーの音、——繊細でありながら鋭く、甘美にこもりながらくつきり透る、あの独特な音を最も好み、また、幼い彼がヴァイオリンは青、チェロは黄などと、楽器の音を幻想したりした〈詩人〉であったことを知っているからだろう。

私がこれから記すのは、今述べた音と主観の結合の自分における拙い十いくつかの例である。遠い日のこともあれば、最近のこともある。他人にとって面白いものかどうか、まったく自信がない。せめて赤裸裸に語りたい。